

东北师范大学文库

本书系东北师范大学图书出版基金项目

# 日本近代文学的 性质及建立

RIBEN JINDAI WENXUE DE  
XINGZHI JI  
JIANLI



◎ 关冰冰 著



东北师范大学出版社  
NORTHEAST NORMAL UNIVERSITY PRESS



东北师范大学文库

# 日本近代文学的性质及建立

关冰冰 著

东北师范大学出版社

长 春

---

**图书在版编目 (CIP) 数据**

日本近代文学的性质及建立/关冰冰著. —长春:  
东北师范大学出版社, 2007. 12  
ISBN 978 - 7 - 5602 - 5107 - 3

I. 日… II. 关… III. 文学史—研究—日本—近代  
IV. I313.094

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2007) 第 189331 号

---

☐责任编辑: 吴东范 ☐封面设计: 张 然  
☐责任校对: 左 哲 ☐责任印制: 张允豪

东北师范大学出版社出版发行  
长春市人民大街 5268 号 (130024)

销售热线: 0431—85687213

传真: 0431—85691969

网址: <http://www.nenup.com>

电子函件: [sdcbbs@mail.jl.cn](mailto:sdcbbs@mail.jl.cn)

东北师范大学出版社激光照排中心制版

吉林省吉新月历制版印刷有限公司印刷

2008 年 1 月第 1 版 2008 年 1 月第 1 次印刷

幅面尺寸: 148mm×210mm 印张: 9.75 字数: 285 千

---

定价: 19.00 元

本书系东北师范大学  
图书出版基金项目

# 目 次

|                                  |     |
|----------------------------------|-----|
| 序章 揺らぐ近代国家の概念と近代文学研究             | 1   |
| 第一章 近代文学誕生の歴史の背景                 | 16  |
| 第一節 近代国家とは何か                     | 17  |
| 第二節 日本における近代国家の成立                | 50  |
| 第二章 ヨーロッパにおける言語状況の変遷             | 70  |
| 第一節 ラテン語の普及と地位の確立                | 73  |
| 第二節 ラテン語の没落と母国語の形成               | 87  |
| 第三章 日本列島における言語状況の変遷              | 109 |
| 第一節 近代以前の多言語状況                   | 113 |
| 第二節 近代日本における「国語」の成立              | 126 |
| 第四章 日本近代文学研究の軌跡                  | 167 |
| 第一節 「近代」と「近代文学」をめぐる研究            | 168 |
| 第二節 「小説」とは何か                     | 194 |
| 第五章 坪内逍遙と日本近代文学の成立               | 228 |
| 第一節 坪内逍遙と政治小説～日本文学界でのナショナリズムの発生～ | 233 |
| 第二節 坪内逍遙と進化論～日本近代文学成立の前提～        | 247 |
| 第三節 坪内逍遙と芸術論～近代小説を支える芸術論～        | 264 |
| 第四節 逍遙の小説観の見直し～日本近代文学の近代化の所以～    | 284 |
| 終章 近代国家と近代文学                     | 297 |
| 参考文献                             | 301 |
| あとがき                             | 305 |

## 序章 揺らぐ近代国家の概念と近代文学研究

はじめに

「文学とは何か」という命題は文学研究を行うものにとって最も根源的な問いであり、これまで多くの文学者や研究者らによって問い続けられてきたものであるが、本稿では最初に「現代という時代において文学とはいかなる存在であり、文学研究が現代という時代において果たすべき役割はどこにあるのであろうか。」という問いを立てることにしたい。

そもそも、文学なるものは古今東西にわたり常に時代を反映してきたものであり、そうした文学を研究対象として捉える文学研究もまた、様々な時代の文脈の中で行われてきたものである以上、時代の影響をまぬかれることはない。そうした意味において、文学研究とは正に対象とする文学作品が生まれた時代を反映するだけでなく、文学研究を行う時代そのものをも反映するものであり、そういう意味において文学研究とは時代を生きる一つの実践であると考ええる。

このため、文学という存在をきちんと把握して認識するためには、それと不可分の関係にある時代そのものをきちんと把握して認識することが必要となる。もちろん、ここでいう時代というのは対象とする文学作品が生み出された時代だけではなく、対象とする文学を研究する現代という時代そのものをも指していることは言うまでもない。そして、現代という時代において文学を見据えるためには、現代という時代を認識せずにはあり得ないということになる。

ここで従来の中国における日本近代文学研究の傾向に言及しておくが、それは文学という存在を客観的な研究対象として認識し、詳細な作家論・作品論に見られるように、文学内部における文学のための文

学研究として行われるものであった。もちろん、それはそれで文学作品を理解することを通じて日本文化なるものを理解する一助として大きな貢献を果たしてきたことは疑いない。

しかしながら、それは一方では文学を純粋な客体として捉えることであり、それぞれの時代における文学作品として真理を究めようとするものであったものの、文学研究者らが位置する現代という時代における文学研究の視覚のありかを十分に認識していたとはいいがたいのではないだろうか。

そこで、本稿は文学研究を現代に生きる時代認識の一つの実践であると位置づけ、現代という時代における日本近代文学研究のための新しい思考の枠組みの組みたてを試みる。そして、その具体的な作業の第一歩として、日本近代文学研究を行う我々が生きている現代という時代を再認識しておくことから始めることにする。

### 一、現代という時代～グローバルゼーションと近代国家～

現代とはいかなる時代であるか。この命題をめぐる様々な議論が交わされているが、ここでは現代中国の代表的な言説の一つとして2001年12月に張倫が雑誌「読書」において発表した「我々は共存できるのか」と題する一文を挙げておく。これは「グローバルゼーション」という視角から冷戦後の現代世界において出現した現象を捉えようとしたものであり、「911事件」を典型的な例として「歴史の終結」や「文明の衝突」という言説自身が新しい歴史を形成していくと同時に、新たに生み出されていく歴史もまたこうした言説に影響していくものだと指摘し、今日の私たちが目指すべき明日の世界の方向性について示唆深い主張を展開したものである。

いまだかつて今日ほど「グローバリズム」という言葉が世界中で盛んになり、市場の威力と効率やそれが人類にもたらした豊かさがこれほどまでに確かに証明され、(中略)長い間熱望されていた平和に達したと認識できるような時代はなかった。

国家という古臭い必要悪は既に次第にその存在理由を失い、あるいは少なくとも日増しに重要なものではないと認識されるようになっていた。しかしながら「911 事件」によって国家は突然に、まるでヘーゲルが「神がこの世にやってきた」と言ったように、再び新しく別の神の「市場」の位置に押し上げられてきた。そして人々はそれが全能の力をもって人々に安全をもたらし、内外からの怖い脅迫を取り除くことを切実に待ち望んだ。(中略) 人類は、少なくとも現代に生きる人類は国家から離れては生存できない。(中略) 市場と科学技術の進歩により人類は空前の相互交流が行われるグローバリゼーションの時代に突入した。だが、それは人類に巨大な福祉をもたらしただけでなく、同時に人類文明の肢体の上にアキレス腱をあまねく作り、多くの無形のデモクリスの剣をつきつけるものとなったのである。(中略)「911 事件」後の今日、「我々は共存できるのか」という時代に入ったと言えることができる。(中略) 人類は狭隘な国民国家と国民文化という明確に隔てられた境界を一層乗り越えていき、共存の道を模索していかなければならない。<sup>①</sup>

少し長い引用になったが、この張倫の主張は現代に生きる私たちを取り巻く環境とそれに付随する意識を描写し、またそこに突きつけられた課題を端的に指摘したものである。実際、国境を越えたグローバルな動きは日増しに発展しており、国家レベルだけでなく、社会の団体レベルや個人レベルにおいてまで行動の基礎を社会的な組織の中で全面的に変革していかなければならない時代となってきた。例えば、人類が地球規模の環境破壊や巨大な破壊力を有する武器によって安全感を喪失し、通信システムや経済現象および全世界を自己確定の参照系として活動するようになってきていることなど、を挙げることができるが、こうした旧来の世界では想像することすら困難な状況が現代において

①張倫、我们能否共同生存，读书，2001，12：58～62。



は現実のものとなっているのである。

これらのことを平たく言えば「世界が狭くなった」ということであるが、環境、軍事、通信、経済等の方面においてグローバリゼーションが実感を伴うまでに普及したことにより人類の活動が地球規模の次元にまで進行し、従来においては果てしなく長く広がったはずの時間と空間が極端にまで圧縮されたのである。

つまり、こうしたグローバリゼーションの進行は私たちの空間認識に大きな影響を与えたということであるが、それを生活の経験レベルにおいて捉えると「ここ」と「あそこ」、「うち」と「そと」、「付近」と「遠方」という区別が少なくなってきたことに還元することができる。一つの典型的な例として通信時間の短縮に伴う意識変化を挙げておくが、例えばインターネット通信を伝達手段の日常の道具とするようになった人々にとっては、空間や時間は既に大きな意味をもたなくなってきたことに鑑みれば、グローバリゼーションがいかに日常性を有するようになったか実感できるだろう。

よく言われるように、本来「付近と遠方」という概念は「確実性と不確実性」を意味するものであったはずだ。これは「自信と躊躇」という視角から捉えることも可能である。というのも、「付近」というのは目の前に存在する現実世界であり、全てが習慣によって認識できる世界であった一方で、「遠方」というのは危険が充満した未知の世界であり、常に大きな犠牲なくしては把握できない存在であったからである。つまり、前者が新鮮味のないものであったとしても自信をもって安心してよい確実な世界であり、後者は未知の存在への憧れを秘めつつも危険で不確実な世界であったのである。

こうして概観してみると、「ここ」と「あそこ」、「我ら」と「彼ら」という対立概念が自明のものとして浮き上がってくることが確認されるが、それはとりもなおさず特定のコミュニティの存在を支える源泉であったことを指摘しておきたい。なお、コミュニティというのは歴史的には特定の地域の部落であったり、都市国家であったり、あるいは帝国であったりと様々な形の共同体を形成するものであったが、現

代の私たちの生活の土台を支える「国家」もまたコミュニティの一形態であるとみなすことができる。

— 実際、世界史の観点から「国家」を捉えた場合、近代以降の国家の多くはフランス革命をはじめとする市民革命によって成立した国家を典型とする「ネーション・ステイト」（以下、本稿では「国民国家」という漢語を使用する）<sup>①</sup> という形態であることが確認されるが、この近代の国民国家もまた地理的には従来の地域的な二次的なコミュニティの範囲が基礎となっている。

そして、従来の地域的なコミュニティの範囲を基礎として国民国家が形成されたという歴史的事実はそこにその後のグローバリゼーションへの方向性の根源が内包されていたことを示している。それは近代という時代の流れが地域的なコミュニティの限定性を押し広げる方向へと発展してきたという歴史の事実を物語っており、近代以降の交通や通信の迅速な発展によって人々が地域の束縛から解放されていっただけではなく、あるコミュニティが形成される意義を境界の外にまで押しやるという作用がもたらされてきたことを表している。そして、それが極限にまで推し進められたのが現代のグローバリゼーションなのである。

つまり、グローバリゼーションとは「時空の圧縮」であり、距離によって隔てられていた地域間の距離が短縮され、甚だしくは距離を失いさえしたのであるが、それが最も顕著に現れたのが経済領域であった。というのも、近代以降の経済システムの中で資本は国境を越える性質をますます発揮するようになったためである。実際、現代世界は金融の流動が基本的には国家政府のコントロールから離脱する傾向をますます強めており、グローバリゼーションの最たる領域となっている。

こうした状況の下、国家はこうした近代以降次第に拡張していた圧

---

① 英語で「nation - state」と表記される「ネーション・ステイト」の概念は日本においては一般的に「国民国家」という漢語単語に翻訳して流布している。

力に抵抗することはなくなり、自由貿易の規制の無制限性や不可阻止性の伝播により、とりわけ資本や金融の自由流動により、「経済」は既に段々と政治的なコントロールから離脱し、国家がグローバリゼーションの進展の中で有する地位はますます低下していった。それが、近代から現代への歴史的な必然の流れであったのである。

しかしながら、こうした流れは大きな矛盾をはらんでいた。それはグローバリズムの進展の中で最新の技術を利用することにより世界各地で巨額の資金を運用して一層効果的な商売をして富める者がますます豊かになっていったと同時に、その一方ではグローバリゼーションの進展によってなんら恩恵を被ることなく貧富の差が拡大されていくのを呆然と見守ることしかできない貧しい者たちの存在が明らかにされていったのである。事実、グローバリゼーションは極めて少数の者たちに非常に有利であると同時に、世界の三分の二の人々には冷たいものであった。

例えば、ポーマンは『グローバリズム～人類の悲しい結果～』において国連が發布した「人類発展報告」の中の数字を引用し、「世界の富豪の上位 358 名の財産の総額が 23 億人の最貧民層の総収入に相当する」とい<sup>①</sup>と述べているが、この報告が伝える衝撃的な数字は、現代世界の矛盾を如実に示すものである。そして、この世界人口の三分の二を占める貧民層には移動の自由がなく、自分が生まれ育った地域に留まらざるを得ず、「遠方」は依然として「遠方」のままであり、彼らにとって距離は克服しようのない大きな意味を有していることを忘れてはならない。いわば、こうした人々にとっては一つの境界に囲まれた国民国家という枠組みは依然として自明な存在なのである。このように、グローバルな現代世界において富める者と貧しき者との差異が金銭的なものに留まらず、時間や空間における世界観の違いさえももたらすものとなっている。

しかしながら、近年、グローバリゼーションを信奉する人々に対す

① 齐格蒙特・鲍曼：《全球化——人类的后果》，北京：商务印书馆，2001：67。

る衝撃的な事件が起こり、世界の一体化による世界平和の実現と経済の繁栄というばら色の世界認識が幻想であったと認識されるに至った。それは冒頭にも引用した張倫の指摘にある「911 事件」の衝撃である。

「911 事件」は局地的なテロリズムの発露というだけにとどまらず、「国家」という存在が新しい時代における「神」のような存在として再び降臨するに至った事件といっても過言ではない。なぜなら、「911 事件」によって国家という存在がこれまでの歴史における様々な状況下において正常な生活を保障してくれてくれたことを思い出させ、そこに人々の帰属意識を保証してくれるものがあり、安全感を求める人々にとって国家なるものが依然として保護者的な存在であると認識されるにいたったからである。

実際、グローバルな活動が進展して国境が従来のような意味をなさなくなったように思われる一方で、国民国家が歴史的にも重要な役割を果たしてきたことは疑いのないことであり、現在の国際関係や国際交流を支える基礎となった工業の発展や科学技術の進歩は多くの国民国家それぞれの内部における国家的プロジェクトの中で成長してきたものだからである。それに、グローバル社会といわれる現代世界において国民国家という存在が止揚され、新しい世界観が確固としたものになったわけではない。はからずも「911 事件」はそのことを象徴的に伝えるものであった。

つまり、グローバリゼーションによって国家間の地域的な障壁が取り払われたかのように見えるが、実はそれは表面的な現象であり、経済行為の主体である企業も実体としては国民国家の枠組みを超えていないということである。また、情報や通信方面においてはマスメディアの発展やインターネット通信の普及で地球規模の情報流通システムやネット環境が整備されることにより国民国家の枠組みを超えた広範な区域内における自由なやりとりが行われるようになったものの、そうした新しい局面の中で生まれるようになった文化やアイデンティティが従来の国民国家や民族の文化やアイデンティティを乗り越えるも

のとなるかどうかは不確実であるといわざるを得ない。というのも、結局のところはグローバリゼーションの進展があったとはいえ、現在に至るまで人類は共同の信仰や価値システムをはじめ、共通した記憶やシンボルや神話、伝統によって国民国家に対するような忠誠を発見しえていないからである。

こうしたことは、国民国家なるものが今後も依然として重要な役割を果たしていくことを物語っているといえる。だが、別の角度から言えば、グローバルな活動は確かに既に形成されているのであり、こうしたグローバルな動きは一旦形成されると以前のように国家を単位として動いていくという以前の状態には二度と戻ることはないのも事実である。いわば、こうした二律背反的な状況が現代世界の一つの大きな特徴であろう。

西川長夫はこうしたグローバリゼーションについての言説を「世界システムの崩壊と再編の混沌とした状況を世界化の観点からとらえようとする試み」<sup>①</sup> であると定義し、地球規模で急激かつ複合的な変化がもたらされる現代という時代を生きる私たちの思考枠組みの「脱構築」の必要性を唱えており、さらに「グローバリゼーションとは文明化の最終局面である」<sup>②</sup> との一つの仮説を提示しているが、正に現代に生きる私たちはこうした時代の挑戦の波にさらされているということである。

また、かつて柄谷行人もまた「一九世紀以来の『近代国家』（ネーション＝ステート）の枠組みが揺らぎはじめている」<sup>③</sup> と認識した上で、終わりこそが「起源」を語るときであると述べている。これはまたグローバリゼーションが進展していくことにより近代国家の枠組みが揺らぐ今日においてこそ、初めて国民国家の枠組みを乗り越えることが可能になることを示唆する発言である。

①西川長夫・国境の越え方。東京：平凡社，2002：373。

②西川長夫・国境の越え方。東京：平凡社，2002：373。

③柄谷行人、＜戦前＞の思考。東京：講談社，2001：14。

さらに、国民国家の実質を認識することの最終的な目標はまさに冒頭で挙げた張倫が述べている「人類は狭隘な国民国家と国民文化という明確に隔てられた境界を一層乗り越えていき、共存の道を模索していかねばならない」<sup>①</sup> という共通した理念であろう。そこで、狭隘な国民国家と国民文化を超えるためには「国民国家」の性質そのものを明らかに認識しておくことが求められる。もちろん、これは歴史や社会や文化などの大きな枠組みの中で立体的に捉えていかねばならない膨大な作業である。

## 二、近代国家と近代文学研究

従来、文学研究とはあくまでも独立した研究領域であり、「国民国家」という枠組みを意識して文学が語られることはなかった。しかし、グローバリゼーションが進展する現代という時代において「国家を超える」という発想から「国家の起源」が問い直され、改めて近代国家の典型的な形態である国民国家に焦点が当てられるようになり、「文学と国民国家」の緊密な関係が浮き彫りにされるようになってくると、両者の有機的な関係に注目する研究の必要性が認識されるようになってきた。

そうした流れの下、とりわけ比較文学研究の領域においては従来の研究者たちが余りにも無自覚に「国家」という概念を自明のものとして拡大再生産させてきたかということに反省の目が向けられるようになってきている。そうした指摘を行った日本近代文学研究者の一人に亀井秀雄がいる。

比較文学は国家という観念を再生産し、補強する役割を果たしてきた。なぜなら、二つの文学テキストを比較文学的に等置することは、たとえその意図は両者の影響・摂取の関係を発見することであったとしても、じつはそれぞれのテキストを相異

①張倫・我們能否共同生存・读书，2001，12：62。

なる文化や言語に帰属させる発想に基づいているからである。結局それは二つの相異なる国語、二つの国民文学の存在を前提とし、その前提を再確認する作業にほかならない。この作業を繰り返すなかで、私たちは国家を、あたかも言語や文学の差異を決定する自明の枠組みの如く思い込んでしまう。次には「外国」の影響を超えて持続する、自国文学の固有な国民的本性なるものを探し始めることになるだろう。このように、影響・摂取の関係を見出そうとする比較文学は、論理必然的に、内在的本質論とも呼ぶべきナショナリティの観念を補強してしまうのである。<sup>①</sup>

このように亀井秀雄は従来の比較文学研究が無意識のうちに陥っていた罫について指摘し、無自覚に国家という観念を再編成してきたことに対する反省を促している。もちろん、これは比較文学研究に限った話ではなく、様々なレベルにおける国民文化論にも見られる現象であるが、比較文学研究に限定して述べれば、「異なる民族の異なる言語による異なる国民文学」を無条件に前提として議論を重ねてきたことは疑いようのない事実である。

本稿はこうした指摘に大きな示唆を受け、それらが自明の前提とされるべきではない枠組みであることを解明していくものであるが、そういう意味で現代的な意義を持つ試みであると自負している。

また、「文学」と近代以降の「国家」の間に見られる緊密な関係については西川長夫がフランス革命とナポレオン戦争を通じてフランスに国民国家が形成されていった過程に焦点をあて、「国民国家」を文化統合の方面から考察している。この西川の指摘によれば、こうした革命運動によって様々な国家シンボル<sup>②</sup>が生み出されていき、それに

① 亀井秀雄、「小説」論「小説神髄」と近代・東京：岩波書店、1999：6～7。

② 例えば後のフランス国旗や国家となる三色旗やラ・マルセイエーズ、フランスの象徴となる赤いフリジア帽などが挙げられる。

よって新しい国民的な時一空が創出されて「国民精神」なるものが形成されていったとのことである。そして、そうした「国民国家」における文化統合の動きの中で文学が果たした役割について次のように述べている。

一般に国家とは無縁のものと思われている文学や芸術——音楽、絵画、彫刻、建築、さらには都市の改造——が国民統合に果たした大きな役割を忘れてはならないだろう。文学を例にとれば、革命派の文学も王党派の文学も、ともに国民にナショナルなイメージを提供し続けていたのであり、それは一九世紀の小説の時代になっても変わらない。ナポレオンの行なったことを文学で実現しようというバルザックの野心は、これまで解釈されてきたよりも、文字通りにとったほうがよいかもしれない。バルザックの雄大な『人間喜劇』の世界は、そのまま国民国家の歴史と空間を映しているのであるから。やがて歴史学と地理学が学問の名において国民国家の神話と国土のイメージを提供し、他国との差異と自国の優越（したがって国民的なアイデンティティ）が強調されるであろう。<sup>①</sup>

このように西川長夫は文学の政治性に注目し、文学作品の作者が意図的であるかなしに関わらず近代以降の文学が「国民にナショナルなイメージを提供」するものであったと述べており、近代文学研究にとっても極めて示唆的な発言であると言えるだろう。次に近代の「ネーション」をめぐる問いを立てることについて小森陽一も大変重要な発言を行っているので引用しておく。

ネーションという概念を立てること自体、近代をその全体と

①西川長夫、日本型国民国家の形成//西川長夫・松宮秀治編、幕末明治期の国民国家形成と文化変容、東京：新曜社、1995：14～15。



して問題化することになるのであり、「ネーションを超えて」という本巻の題名は、客観的なレヴェルでも主観的なレヴェルでも定義不可能な、ネーションという概念それ自体を、近代国民国家とのかかわりにおいて全面的に再検討することを含意しているのである。(中略)したがって、ネーションについて問うことは、常にグローバルな地域的關係性の中における、政治的、軍事的、文化的ヘゲモニーの歴史性について考察することになる。ネーションの形成において、言語はその要の位置にある。ある地域で特定の歴史的状況の中で権威化された言語表現が「文学」であるとするなら、「文学」は常にネーションの存在様態を表象しているのである。<sup>①</sup>

つまり、「ネーション」に対する問いを立て、「国民国家」という概念を的確に認識することは、グローバリゼーションが進行しつづけている現在において不可欠な作業であり、「異なる国家」とされてきた地域の関係性において歴史や社会や言語や文化などの枠組みを再構築して世界を見直してみることにつながるものである。

また、小森陽一が述べているように「文学」なるものが特定の地域における特定の歴史的な状況の中において権威化された言語表現であるという視点に立てば、正に「文学」は近代の国民国家を体現するものであり、そこから「近代における近代性」の特質が明らかにできるのである。

### 三、本稿の研究視覚、研究対象および構成

本稿は文学および文学研究を「国民国家論」の視覚から捉え直し、文化共同体という角度から日本近代文学の近代性を追究していくものである。そして、日本近代文学を日本近代文学たらしめている特質を

<sup>①</sup>小森陽一、まえがき//小森陽一他編、岩波講座文学13 ネーションを超えて、東京：岩波書店、2003：2～3。